

P-245

薬剤師による病棟薬剤業務の充実をめざして ～薬剤プロジェクトの活動報告～

長浜赤十字病院 看護部

○奥野^{おくの}佐^さ千^ち子^こ、西嶋 長、中島すま子

平成24年度診療報酬改定にて「病棟薬剤業務実施加算」が新設された。これは薬剤師が病棟で週20時間以上の薬剤業務実施に対する評価であり、医薬品の投薬・注射状況の把握、医薬品の安全情報の把握・周知、医療従事者からの相談、持参薬確認等7項目の業務である。当院は地域医療連携支援病院であり、特に高齢入院患者において「薬剤」に関する病診連携のニーズは高い。そのため、院内の多職種によるプロジェクトを結成し、病棟薬剤業務の充実に向けて取り組んだ。そのプロセスと結果について述べる。

【期間】2012年5月29日～2013年3月31日

【目標】薬剤師による週20時間の病棟薬剤業務の実施

【計画】多職種で病棟薬剤業務について検討し、薬剤師が実施する。
【実施結果】1.病棟薬剤業務の試行:2名の薬剤師が交代でモデル病棟にて薬剤関連業務を実施し、業務日誌を記載。2.ヒヤリハットの共有:病棟で発生している薬剤関連のヒヤリハット事例を、薬剤部の朝礼で共有した。3.薬剤師の病棟滞在時間の調査:滞在時間の調査の結果、病棟に薬剤師用端末を設置した。4.持参薬調査:持参薬がある入院患者は全体の67%、内科病棟が最も多いことがわかった。5.多部門との連携:救命救急センターの院外から院内処方への切り替え時間を変更した。6.薬剤師による週20時間の病棟薬剤業務を目標に取り組んだが、達成に及ばなかった。

【まとめ】1.多職種で病棟薬剤業務確保のための対策を検討し、実施できた。2.薬剤業務日誌を各薬剤師が記載、薬剤部長が病棟滞在時間を確認できた。3.2つの病棟に病棟薬剤師専用PC端末を設置し、病棟滞在を支援した。

【今後の課題】次年度は、いくつかの改善案を多職種で検討実施し、「病棟薬剤業務実施加算の算定」を目標に実践していきたい。

P-247

病棟薬剤業務実施加算における業務内容と今後の課題

高松赤十字病院 薬剤部

○合田^{ごうだ} 哲^{てつ}子^こ、岡野 愛子、筒井 信博

【目的】当院では10病棟に担当薬剤師を決め、薬剤管理指導業務を行ってきた。2012年4月、病棟薬剤業務実施加算が新設され、新たに2病棟（ICU、救急病棟）に薬剤師を配置し病棟薬剤業務実施加算の算定を開始した。病棟薬剤業務では薬剤師がチームの一員として今まで以上に医療従事者の負担軽減、薬物療法の有効性・安全性の向上を推進することが求められている。今回、病棟薬剤業務の現状を把握し今後の課題を検討した。

【方法】調査期間は2012年11月1日から2013年4月30日までとし、業務日誌と診療録より月当たりの業務時間と業務内容記録を調査した。業務内容を日本病院薬剤師会編集の「薬剤師の病棟業務の進め方Ver.1.0」に従い分類した。また、病棟専任薬剤師にアンケート調査を行った。

【結果】業務時間は月平均96時間～129時間と病棟毎に差があった。業務内容記録は2453件で、持参薬報告・初回面談が66%、処方変更等の提案・継続処方の代行入力21%、スタッフからの相談応需、アドヒアランスの評価、薬物療法の提案、ハイリスク薬の事前説明、TDM報告がそれぞれ3%であった。薬剤師毎の記録件数は17件から600件と大きな差があった。アンケートからは、病棟ごとに業務内容に違いがあること、問い合わせ応需や配薬カート管理等個々の患者の薬物治療に直接関わらない業務があることがわかった。

【考察】病棟薬剤業務を実施し投与前における患者に対する業務、病棟スタッフと連携した業務が増加している。その結果、病棟専任薬剤師の負担が増え、人員配置の工夫等対策が必要と考えられる。今後は、業務の質と効率性を高めるための業務の標準化を行うこと、実施率が低い副作用の発現、効果の確認のためのラウンドとバイタルサイン・フィジカルアセスメントの実施、薬物療法プロトコルの設計提案について検討していきたい。

P-246

病棟薬剤業務実施に向けた当院の取り組み

大森赤十字病院 薬剤部

○遠藤^{えんどう} 修^{しゅう}司^し、市川 騰、平岩 知子、市川 敬太

平成24年度の診療報酬改定で病棟薬剤業務実施加算が新設され、薬剤師が病棟において、より患者の近くで職能を十分に発揮し、医師、看護師と協働することで医療の質、安全性をさらに向上させることが期待されている。しかしながら、限られた薬剤師数で全病棟（ICU含め8病棟）における週20時間以上の病棟業務を実現するためには従来の業務体制や調剤システムでは困難であり、その見直し、再構築が必要であることがわかった。当院では一昨年度より調剤室内の薬剤師が実施している業務の効率化を図るべくSPDを導入し、SPDによる薬品払い出し補助、アンブルピッカーや錠剤分包機への充填補助、注射薬品取り揃え補助、返品薬および廃棄薬の処理業務補助、調剤済み処方の部内配送、処方箋整理、各種清掃業務、データ処理業務の移行、持参薬指示表作成時間の入力業務などの業務を一部移行した。今年度より錠剤一包化補助業務も開始しており、業務が効率化され、薬剤師が病棟業務を行う時間確保の原動力となった。これと並行して中央業務担当薬剤師数を減らし、新たに薬剤管理指導業務を含む病棟業務専任薬剤師を配置した。段階的な増員を経て現在4名が病棟業務に専念している。また、院内電子カルテ共有フォルダに病棟業務日誌を作成し、短時間で入力できるよう工夫した。院内LANでPMDAの医療安全情報を配布するなど、速やかに安全性情報が病棟スタッフに提供できるよう環境整備を行った。また、ミニ勉強会を病棟で開催し、新規採用医薬品情報や看護師からの疑問などに対する情報提供を実施し、医療の質の向上に資する取り組みも実施している。これらの取り組みを経て、昨年度の8月より病棟薬剤業務実施加算を取得するに至った。

P-248

精神科病棟における薬剤業務の評価と今後の課題

諏訪赤十字病院 薬剤部

○谷口^{たにぐち} 純^{じゅん}子^こ、関口 展貴、登内 盛治、跡部 治

【はじめに】2012年度の診療報酬改定をうけ、当院薬剤部は2012年10月から病棟薬剤業務を開始した。算定条件として、全病棟で薬剤業務を行うことが必須とされる。当院精神科病棟は、これを機に薬剤師の業務拡大を行った。1病棟あたり週20時間相当以上が必須とされることもあり、病棟業務に携わる時間が増えた。薬剤業務開始前のアンケート結果も参考にして業務拡大に取り組んできた。再度、薬剤業務開始後に看護師にアンケート調査を行った。業務に対する現状と今後の取り組みについて検討したので報告する。

【方法】薬剤業務開始前2012年5月と開始後2013年1月に精神科病棟に勤務する看護師を対象にアンケートを実施。看護師の評価・意見をもとに現在の業務内容について検討した。

【結果】開始前では、薬剤師業務として求められるものは服薬指導50%、薬剤管理30%であった。要望する業務として服薬指導のフィードバック70%、薬剤管理60%、カンファレンス参加50%であった。開始後では、薬剤業務で実施を開始した項目（配薬カートセット、情報共有、持参薬、薬の情報提供）に対してほぼ全員から良くなったとの評価を得た。インシデントに関してのみ、変わらなかった75%となり、配薬時に発生することが多くなっていった。看護業務集中度向上に対して貢献している94%となった。今後の関わりについては、処方支援（代行を含む）、医薬品管理が50%程度となった。

【考察】薬剤業務により、実施した項目に対して良くなったとの意見が大多数となり、薬に関する業務軽減により、看護師業務向上に貢献できたと考えられる。実施前の要望業務であった、服薬指導のフィードバックやカンファレンス参加も積極的に良い意見を得た。今後はスタッフとの情報共有を積極的にを行い、薬剤師として副作用軽減、患者満足度向上に務めていきたい。